

「Inflammatory Bowel Disease Diagnosis and Treatment」

Edited by Gary Gitnick

炎症性腸疾患 (IBD) に関する書籍は多い。筆者が大腸疾患に取り組み始めた頃、Brooke and Stammers (1954)、Bacon (1958) などの ulcerative colitis を探し出して読んだのとは今昔の感がある。今や各出版社あるいは研究者は、IBD に関する成書の 1 つも出していないと沽券にかかわるとすら言えるほど花盛りである。

類書が多い中で特徴を出すのは大変なことで、各著・編者が苦労されるだろう所である。本書は、1. 病因と疫学 (90 頁)、2. 臨床 (50 頁)、3. 診断 (50 頁)、4. 予後 (50 頁)、5. 内科治療 (180 頁)、6. 外科治療 (40 頁)、7. 治療上の諸問題 (70 頁) から成り、治療、特に内科治療に力点が置かれているのはページ配分からも明らかである。

タイトルに “IBD” と銘打つからには、全ての領域にわたって記載しなければならないし、現に日本でもよく読まれている Allan ら、あるいは Shorter, Kirsner の成書にはそのような傾向がみられ、通読するというよりも事典的に使う本のように見受けられる。本書も 500 頁余りから成る大部なものであるが、治療以外の部分は必要最小限にとどめてある。副題に “診断と治療” とある

が、診断は内容も写真もあまり感心したものではなく、特に内視鏡写真の大部分がカラーでなく白黒である。色のない内視鏡は内視鏡でないということがわかっていないのは残念である (特に UC の項が悪い。まあ、日本人で IBD の診断に関心があって、外国の本を買う人はあまりいないであろう)。

それに比べて治療の項は充実している。特に Part V “Medical Management” の項は充実しており、栄養療法からサラゾピリンやステロイドはもちろん、Cyclosporin A や T-lymphocyte apheresis に至るまで、まんべんなく、しかも深く取り上げている。SASP の作用機序に関する最近の知見なども平易に述べられていて、臨床家にとっても、知識の整理に益する点が多い。また、実際の投薬スケジュールも含めて記載しており、日本人と欧米人とで薬剤投与量などに若干の違いはあるものの、第一線の臨床家の方々にも非常に参考になると思われる。

また、Section 28 “The Physician-Patient Relationship” という項目が Part V に特に設けてあるが、これは炎症性腸疾患の治療管理における医師-患者関係の重要性に対する博士の信念によるものであろう。こ

では、患者への説明のうえでのポイントや、患者の疑問に対する答え方、長期にわたる管理での様々な問題点などを具体的に説明してあり、臨床の場で実際にしばしば遭遇する悩みでありながら、従来の成書にはあまり記載がなかった点だけに、大いに役立つ。同様に、Section 7 “Genetics” で述べられている “Genetic Counseling” も役立つであろう。

また、本書では各項ごとに conclusion や summary があり、references や index も充実しており、非常に利用しやすくなっているのも、多忙な第一線の臨床家にはありがたい点である。本書は大部な割には一段組で、通読も可能であるし、もちろん事典的にも使える。まず summary や conclusion を通して読み、それによって興味を感じた点を本文に立ち返って読むことにより、短時間のうちに IBD に関する、広く部分的に深い知識を得ることができる。

全体として、 “this book fills a need for an up-to-date clinical and concise overview of inflammatory bowel diseases, their diagnosis and treatment” という著者らの意図は成功しており、炎症性腸疾患の治療に携わる医家の方々に御一読をお薦めする 1 冊である。

(東京女子医科大学助教授・消化器内科)
長廻 紘

● 560 pp. 107 figs. 1991 年
¥18,000 (税抜き)

— Igaku-Shoin Medical Publishers, Inc., NY 医学書院洋書部